

宮本正勝原案 小川政弘脚色「神様が目を留めた人」

山本元(27歳)	小川 政弘	なみえさん	大橋めぐみ
川島美枝(36歳)	平本 保子	さだこさん/ラジオの声	村田 泉
杉山宏(三郎の義兄 53歳)	宮本 正勝	ナレーション	大橋めぐみ
林(神学生 35歳)	畠山 裕樹	アナウンサー	大橋めぐみ
牧師(70歳) / 神の声	小川 政弘		

神の声 (エコー) 私が目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、私のことばにおののく者だ。(イザヤ66:2)

アナウンサー 当たり前のことですが、どなたも、初めてこの世に生まれ、初めて大人になり、最後まで初めてこの世を終えるわけですよ。全てが初めてなんだから、いろいろうまくいかないことがあるものです。時にはその初めての体験がきつすぎて、疲れて、何もかも投げ出したくなることもあっても、不思議ではありません。でももし、そんな自分に目を留め、見捨てずに受け入れてくれる人がいたら、あるいは人生、初めからやり直すことができるかもしれません。今日の主人公も、そんな一人でした。では、宮本正勝作、小川政弘脚色、オーディオドラマ「神様が目を留めた人」、どうぞお聴きください。

なみえ でも、元<sup>げん</sup>さんに初めてここで会った時はびっくりよ。日本一周なんてのぼりをくっ付けた自転車だもん。本州からここまでずっと野宿だったって、上から下までもう真っ黒。

さだこ なんでまた、そんな気を起こしたのかしらね？

なみえ 疲れちゃったんじゃないの？ 中学を終えてからずっと苦労続きだったって。こらえきれない何かがあったのよ。

さだこ それで、全部投げ捨てて自転車ってわけ？

なみえ でもね、それなりに頑張ったみたい。新聞や牛乳配達やって高校は出たけれど、でもなぜか卒業式は出なかったって。元さん、何か深いわけがあるのかもね。

さだこ あの人、ほんとの名前は山本<sup>はじめ</sup>元さん。“元気”の元で“はじめ”。でもなぜか、みんなどこでも元<sup>げん</sup>さんと呼ぶの。髪はぼさぼさでヒゲ面、着てるものもなんか“着た切り雀”で風采はあがらないけど、とにかくよく動いて気転がきくので、どこでも重宝がられるんだって。あれで年はまだ27歳だってよ。

なみえ そうなの？ もう 40 近いかと思った。苦勞したんだね。重宝とえば、自転車しか乗れないかと思ったら、どうしてどうして、車の普通免許の他に、いろんな免許を持ってて、大型トレーラー免許まであるんだってよ。

さだこ フォークリフトやトラクターはもちろんだけど、何て言うの？ ほらあの重たいものを吊り上げるやつも持っているんだって、それにボイラーから危険物取扱いまで、免許証オンパレードよ。よくそれだけ取る時間があつたものね。

なみえ でも、何かあるのよね、自転車で旅に出たわけが。う～ん、気になる。元さん、お話ししてよ。

ナレーション …と、元さん談議に花を咲かせている二人は、ここ北海道は積丹半島の小さな町の、川島果樹園で、栽培のお手伝いをしているこの町の主婦、なみえさんとさだこさんです。そう、この物語の主人公、“元さん”こと山本元<sup>はじめ</sup>さんは、東京から自転車一台で、3 か月かけて、この半島までたどり着いたのです。では彼に、ちょっと自己紹介をしてもらいましょう。

M(心が慰められるような)

山本元 山本元<sup>はじめ</sup>です。いや、この際“元さん<sup>げん</sup>”で呼んでほしいな。そのほうがなんかうれしい。家がハンパじゃなく貧しかったんで、高校時代から学校の目を盗んでバイト、時には掛け持ち、とにかく金になることなら何でもやった。あとで聞いたら相当ヤバかったらしい仕事もあつて、まあ、よくだまされたよ。俺も負けずにだませるやつはだましたけどね。勉強？ 振り返れば俺の人生みんな勉強だったとは思うけど、そこそこ金は手にしたものの、俺のいわゆる“人間づくり”にはみごとに役立ってないな。ただ要領よくやることは覚えたけれどね。覚えたって言えば、真っ先に覚えたのはなんたって酒とパチンコ。もうイヤと言うほど漬かったね。何せ日当いくらの土方仕事が圧倒的に多かったから、雨が降るととたんに仕事がない。どうしてもそっちにいつちやうわけだよ。高校は何とか出たけれど、ただお情けで証書はもらったってだけ。勧められて、何度か落っこちながら色んな免許も取ったけど、ほとんど仕事には結び付かなかつた。何やっても長続きしなくて、親方は変える、先輩も変える、当然どんな仕事も何一つ身に着かない。「こんな生活にケリをつけたい」と思って、ある日俺は、寝袋と 2、3 枚の下着と飯盒<sup>はんごう</sup>などの入ったバックパック 1 つを荷台にくくり付け、自転車一台で、東京をあとにして、ふらりと旅に出ちやつたんだ。

M(のどかな曲)

○果樹農家

ナレーション その元さんが今、たどりついて世話になっているのが、「♪思えば遠くへきたもんだ」ではありませんが、ここ北海道の、小樽の西に位置する積丹半島の貧しい果樹農家「川島果樹園」です。彼は、道の駅の貼り紙を見てやってきました。ここで栽培しているのは、りんごが主で

すが、ブドウ、サクランボ、ハスカップなどの栽培にも色々挑戦してきました。でも、たびたび経営者が変わったせいか、どれもが今ひとつで小規模にとどまっています。5年程前に川島三郎さん・美枝さん夫婦が引き継いで、名前も「川島果樹園」に変えましたが、やっと商売が軌道に乗りかけた矢先、三郎さんが事故で他界、今は近くの杉山のおじさん夫婦に助けられて、何とかやっています。季節が変われば、いやおうなしにやるべき作業が待っていて、人手を借りてでも事を進めなくてはならないのです。その大事な助け手が、なみえさんとさだこさんというわけです。

なみえ 杉山のおじさん、おばさんや、教会の人たちがよく助けているけど、娘の道子ちゃんは もう6年生でしょう。

さだこ 母子家庭で農業経営じゃ大変よね。今は何でも元さんが中心に動いてるけど、元さんはずーっといるわけじゃないし、重機をやれる人、他にいないかしらね。元さんがここを気に入ってくれるといいんだけど。

なみえ 元さんは気に入ってるんじゃない？ けっこう気持ちよく働いてるわよ。「俺の数ある免許の中で、やっと重機免許が役立ったよ」って。

さだこ そうならいいけど。いなくなったらみんな困っちゃうもんね。

元ナレーション そうなんだ。俺はこの果樹園と、この土地の人々の良さが初めから分かっていた。なんか、心の芯に、ビビッと響いてきたんだ。今まではどこへ行っても、孤独な連中と酒を交わすだけの付き合いだった。でもここは違う。みんなが母子家庭の美枝さんと娘の道子さんを助けている。そう、まるで家族だ。むろんなみえさんもさだこさんも、生計のために働いているんだけど、でも一人一人の思いは優しく、“助け合う家族”がここにはあるんだ。家族と言えば、この親子となみえさん、さだこさん、それに、神学校の支援実習ということで、去年からこの果樹園を手伝っている林さんも、みんな町の小さな教会に通っている。俺も連れていってもらったけど、初めて入った教会の雰囲気、牧師さんをはじめ、これがまた家族のようだった。この町は、何か誰もがあったかい心を持った“大家族”だ。それが、俺の心を、この土地に、この果樹園にぐっと引き寄せて、離さなかった。こんなの、生まれて初めてだよ。

ナレーション さて、みんながその日の仕事を終え、ひと休みしたところで、打ち合わせが始まったようです。

美枝 お疲れさんでした。明日のことでちょっと時間をもらいます。明日は行者ニンニク採りに山に行ってもらいます。林さんは何回目ですか。

林 えーと、去年が初めてだから2回目です。鹿の群れに驚きました。

美枝 林さん、そのことで杉山のおじさんから何か言われましたか？

林 「熊が出たら下へ逃げろ」です。

元 なぜ下なの？

林 熊は上へ行くより下に降りるほうが遅いってことなんです、出たら同じですよ。(笑い)

元 怖いな。

美枝 杉山のおじさんが車で送ります。同じところに3時ごろ迎えに行きます。弁当はおにぎりです。お茶代わりの水は冷たい沢の水。おいしいわよ。

林 携帯ラジオは新しい電池を入れておきます。

ナレーション 打ち合わせが終わっても、神学生の林さんと元さんはそのまま残っていました。

元 林さんは牧師さんになるために勉強しているんでしょう？

林 そう願っていますが、全てはみ心です。

元 み心？

林 神様のお考え次第ってことです。

元 いつか聞きたいと思ってたんだけど、ここんちはキリスト教でしょう？

林 そう、亡くなった美枝さんのご主人三郎さんが熱心なクリスチャンで、助けを必要としている人のための農園を夢見ていたんです。でも始めたばかりの時に…。

元 事故っちゃったんだってね。傾斜道はマジ危ないんだよ。

林 ご主人の思いを美枝さんが引き継いで、本当によくやっています。だから教会の人も応援しているんです。

元 あの柱にかかっている言葉は、ひょっとして聖書ですか？ どういう意味なの？

林 ああ、あれ。「私が目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、私のことばにおののく者だ。」(イザヤ書 66章 2 節)あれ、元さんにはマジ難しいだろうなあ。「私」って言うのは神様なんです。その神様が、「目を留める」、つまり、特別に心にかけてくれる人というのは、「貧しい者、霊の砕かれた者、神様の言葉におののく者」だってことです。

元 あ、「貧しい者」ってのは、俺、大当たりだよ。毎朝財布とにらめっこだもんな。

林 (笑)それを言うなら僕もですよ。でも神様の言うのは、「心の貧しい者」です。神のみ子のイエス様も、「心の貧しい者は幸いです」とおっしゃってる。「天国はその人のものだ」って(マタイ 5:3)。それはつまり、心がへりくだって、神様のみ言葉を畏れかしこんで聞く者ということなんですよ。

元 へえー、初めて聞いたよ。聖書って、そんな難しいことが書いてあんですか？

林 いやいや、もっと分かりやすい言葉もいっぱいあります。元さんも、いろいろ今まで苦労してきたんだから、一つ聖書を買って、まじめに読んでみたらどうかな。

元 いやあ、俺なんか、からきし頭弱いからなあ。でも、なんか、引かれる言葉だなあ。

元ナレーション 俺は、そう言って林さんと別れたが、再びその言葉に出会う時が来るなんて、その時は全く思いもしなかった。

事の次第はこうだ。秋も深まった頃、町の教会で伝道集会があった。キリスト教について、聖書について知りたいと思っている人のための集いだった。俺も林さんに誘われて、それに出席した。20人程度の集会で最初に一人の人が、“証し”というらしいけど、信仰についての体験談を話した。その人っていうのが、なんと俺も毎日会っている美枝さんだった。

美枝 ご承知のように、私の毎日は苦しみだらけです。いつも、支払いに追いかけて、なんか、鎌を振りかざした人が、すぐあとから追いかけてくるような毎日です。主人を事故で亡くしたのは、娘の道子が小学生になったばかりでした。その時はもう“どん底”でした。主人は熱心なクリスチャンでしたが、私は、主人にくっ付いていただけの何も分からない者でした。でも主人が突然私の前からいなくなって、明日からは娘を育てながら、主人の残した果樹園をやってかなきゃならないと思ったとき、私は、初めて、庭に飛び出して空を見上げ、もう死に物狂いで叫びました。「神様、助けてください！」と。すると、不思議なんです。本当に神様は私の叫びを聴いてくださったのです。ある時、祈っていると、夫が居間に貼っていた聖書の言葉が、それまでは難しくて、ほとんど頭になかったのに、突然、まるで神様が直接私に語りかけているように、響いてきました。

神の声 (エコー)「私が目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、私のことばにおののく者だ。」

美枝 それを聴いた時、なぜか知らないけど、「あ、神様は私に目を留めてくださった。私は大丈夫だ」っていう気がしたんです。なんか、肩の力がスーっと抜けて、ほんとに安らかな気持ちになりました。その時から、相変わらず生活は厳しいですけど、なみえさんやさだこさん、去年からは神学生の林さん、そして今年に入ると山本元さん、あ、本名は元<sup>はじめ</sup>さん、そして町の皆さんにも助けていただいて、毎日を頑張っています。果樹園のほうも、「もうたたんでしまおうか」と思うことも何度もあったんですけど、そのたびに助けが与えられて、ここまで続けてこられました。神様と皆さんに、心から感謝しています。

元 それから、牧師先生の話が始まった。俺の頭の中には、さっきの美枝さんの話がまだ強く残っていた。神は、そんな風に人間の心に語りかけるのか。そして人間を変える力を持っているのか——。なんか、神様というのは、とてつもなくスゴい存在に思えてきた。

牧師 先日、日曜礼拝に初めてこられた年輩の男の方がありました。礼拝を終えてその方と二人だけの時を持ちました。なかなか故郷に帰れなかったのですが、年老いたお母さんのことが心

配でたまらず、遂に決心して戻られたのだそうです。その方はクリスチャンではありませんが、私の前で涙を流して今までの至らなさを悔い、お母さんのこれからを心から祈っていました。

元ナレーション 俺も帰らなかった。親父が死んだ時は新聞配達で休みが取れなかった。それでもいいやと思った。でもおふくろが死んだ時は休みをとって上野駅まで行った。ちゃん行ったんだ。そこから汽車に乗って、故郷に帰るつもりで。そのとき俺は、今まで聞いたことのない、小さいけど確かな声を聴いた。

神 (エコー) そう、お前はお母さんのために上野駅まで行ったね。でも列車には乗らなかった。なぜ乗らなかったのだ？ お前が預金を下ろして持ってきた全財産の7万円をお前はどうしたのだ？ 人に取られたのか？ 落としたのか？ 使ったか？ いや、お前は帰らないで酒を飲んでしまった。母親になんの親孝行もできず、死に目にも会えなかった惨めさと、母への申し訳なさに胸がつぶれそうになって、それを忘れるために、あの晩お前は、したたかに飲んで、酔いつぶれてしまったのだ。

元ナレーション あの日のことが、まざまざと心によみがえってきた。それは、いくら心の中から消そうとしても、決して消えることのない、俺の“負の記憶”だった。俺の胸は高鳴り、苦しくなった。その時だ。牧師の声がまっすぐに俺の胸の中に飛び込んできた。

牧師 神様が目を留めるのは、立派な人だからではない。もがき苦しみ、そこから逃げたいと真底思っている人です。聖書の中で神様ははっきりと「私が目を留める者は、へりくだって心砕かれ、私のことばにおののく者だ」(イザヤ書 66 章2節)と約束しています。人間の、自己中心の罪から来る苦しみを見かねた神は、人が及びもつかない方法で、私たちを救おうとされました。神様は、ご自身の独り子であるイエス・キリストをこの世に送られました。そしてイエス様は、人間の罪の身代わりとして十字架の上で命をささげられたのです。このイエス・キリストの貴い血によって、信じる全ての人の罪が赦されるのです。神様は今、罪の記憶に苦しむあなたに“目を留めて”おられます。さあ今、神が備えた恵みの世界に思い切って飛び込んでください。愛を持って、あなたを赦すために招いておられる神様のみ前にへりくだり、「主よ信じます。罪ある私を赦してください。」と叫ぶとき、あなたは神の子とされます。長い間の心の苦しきは、イエス様が代わりに負ってくださいます。あなたは、恵みと平安の世界に、今、この場で入れられるのです。

音楽 (静かな招きのメロディー)

元 (モノローグ) 俺でも…、こんな俺でもか？ …神様、助けてください。俺を変えてください！

元ナレーション その時、俺は、神様が、確かに目を留めてくれたと思った。これまでの人生で一度も味わっ

たことのない、なんか、すごく穏やかな気持ちになった。気がついたら、涙がどっと流れてきて、俺は慌てて目を抑えたが、涙はしばらく止まらなかった。その時から、俺の心の深いところで、何かが変わった。

ナレーション それから1週間して、大きな台風が、ここ、積丹半島を襲いました。

ラジオの声 (フィルター音)ここで台風関係のニュースを繰り返します。台風12号は940ヘクトパスカルと、再び勢いを強め北東に進んでいます。明朝6時には、秋田県沖にあって、まもなく積丹半島に再上陸の見込みです。(FO)

杉山 風は相当強そうだが、それ以上に問題は雨だ。昨日と一昨日で大方リンゴは採れたので良かった。少し早めだったけど何とかなる。まだまだこれから落ちるけど、それはしょうがない。ハウスはまともにくらったら駄目だが、さくらんぼの木だけは何とか残したい。ロープで止めておこう。

美枝 外にでるときは必ずヘルメットをね。何が飛んでくるか分からないから。タオルはここにあるのを何でも使って！

ナレーション ここで、この果樹園の外の状況をお知らせしておきます。みんながいるこの家の裏手はずぐ山で、その山の斜面を切って林道があります。少しの間隔で谷があり、山からの湧き水はそこに導かれます。そして、その流れは林道の下をくぐって下の川へと注がれます。普段は、コンクリートで敷設された水路が大げさに見えますが、何年かに一回、その水路が暴れ出します。なぜなら降った雨のほとんどはそこに導かれるようになっているからです。だからそのときはあちこちでダムの放流が始まったようなすごい形相となり、水の被害も増えるのです。

杉山 すごい水だ。こんなこと初めてだ。さっき上の奥の方で地面が崩れたみたいだな。

元 おじさん、あそこやばいよね。家の土台に流れがもろに当たって少しずつえぐれてるよ。  
林 吹き出た水があの岩にぶつかり、跳ね返って家の方に来ているんですよ。あの岩がなければ向こう側に流れていくんですが、どけられないかな。

杉山 さて。かなりデカイからな。

元 よし、一丁やってみるか。

杉山 いや！ それは危ない。

元 大丈夫だよ、おじさん。俺の免許は、この時のためだよ、きっと。

みんな (口々に) 美枝「無理しないで」林「大丈夫かなあ」なみえ「元さんやるの？」さだこ「気をつけてね」

元 エンジン大丈夫だよね。

杉山 エンジンは大丈夫だけど、下に降りる時、足場に注意してな。

元 分かってます。じゃね。

効果音 (ドアが開く。暴風の音。ドアが閉まる)

杉山 窓から見えるか？

林 はい、元さん重機に乗りました。カッパがもうびしょびしょだ。

効果音 (エンジンの音)(重機の挑戦する音)

林 あ、上のは水路に転がせたんですが、下の大きいのがどうしても無理そう。あ！ 元さんエンジン止めて、降りてきた。戻ってきます。

効果音 (ドアが開いて暴風雨音アップ。すぐ閉まる)

元 ごめん、ダメだ、どうしても下のが動かない。

杉山 うん、いいよ、あれはデカすぎる。無理しなくていいよ。

美枝 そう、顔拭いて、元さん、さあ拭いて、もういいよ。

元 みんな聞いてくれ、祈るんだ！ 俺たちを見ている神様がいるんだから、こういうときこそ、この家が守られるように神様にお願いしよう。 そうだよ、おじさん。

杉山 ん？ あ、ああ、そうだ。祈ろう。

美枝 林さんお願いします。

林 分かりました。祈ります。主よ、この小さな、でもとても大切な果樹園をお守りください。天の神様、今、水の流れを変えてこの家が流されないように、あの岩を動かしてください。台風から、雨から、私たちを守ってください。イエス・キリストのお名前によってお祈りします。

全員 アーメン。(それは大きな声)

音楽 (アメージング・グレイスのような霊的な音楽が高まって)

林 あ、少し動いた。あんな大きな岩が少し動いたぞ。(なおも見ている、少し間)おじさん、今度はいけそうですね。いけますよ！

杉山 元さん頑張ってるな。どれどれ。(窓から見る)元さん足場だ、足場に注意しろ。よしいけるぞ！

みんな(口々に) 「ほんと？」「見せて！」

なみえ/さだこ 「動いた！」「ほんと、動いた！」

美枝 もう少し！ もう少しよ！

効果音 (岩が崩れる音)

林 水が、そのまま下にそれて流れてます。流れてます。ほら！

杉山 助かった！

みんな (口々に) 「よかった！」「助かった！」「神様感謝します！」など。

音楽 (盛り上がって、静かに FO)

アナウンサー      いかがでしたか？ これが台風の時に、川島果樹園に起こった“奇跡”のお話です。  
川島果樹園は小さく、貧しいです。でもなぜか守られています。きっと、ここに来た誰もが「このまま門を閉じさせるわけにはいかない」と思い、助ける側に加わるからです。この果樹園は、そんな口では説明できない力を持っているのです。こういうのを「不思議な神様の業」と言うのでしょうか。その後の元さんですか？ もちろん、しばらくここにとどまることにしました。と言うより、彼には“新しい居場所”が与えられたのです。美枝さんといい、元さんといい、人は、ひとたび“神様が目を留められる”とき、神様と人のために、新しく生きる“自分の居場所”を与えられるのかもしれないね。

音楽                (静かに盛りあがって)

おわり